

育てたい保育士

分かち合う存在になるために

ハーベスト医療福祉専門学校のリトミック保育学科には、めざす保育士像があります。

女性の社会進出が進み、また離婚の増加によって子どもをひとりで育てるお父さんお母さんも少なくはありません。こうした時代を背景に、保育園（所）は、仕事で家を空ける保護者に「代わって」子どもの面倒を見る役割から、保護者と共に子育てにかかわる役割への変化を求められていると本校は捉えています。であれば、保育士は、子どもの成長に関するすべてを分かち合う存在でありたい。保護者の喜びを倍にし、不安・悩み・さみしさを半減させることのできる存在にならなければいけないと考えています。

保護者が願うのは、子どもの幸せな未来です。たくさんの人とかかわり、人を愛し、人に愛される心豊かな人間になってほしい。その願いを共有し、そうした未来へ向かう成長の過程に何が必要であるのかを、自らの知識・技術を総動員して一生懸命考えることのできる保育士を、本校は育てたいと思っています。

リトミックを取り入れる理由

子どもたちの未来を見つめる上で、大切なもののひとつは、「感じる心を育むこと」であると考えています。そしてそのために、まず保育士が、日々の出来事や未知のものに対して驚いたり喜んだりする感性を、意識して

育むことが重要だと本校は捉えています。

幼児教育において有効とされる「リトミック」を、カリキュラムに取り入れているのは、保育士たちの感性と表現力を育むことを大切に考えているからです。

リトミックは、20世紀初頭にスイスで生まれた音楽教育法です。音楽（音とリズム）を「感じる」と、身体が自然に動くという誰もが持つ力を活かして、身体、感性、知性のバランスがとれた「育ち」を支援します。

本校では、日本におけるリトミック教育の第一人者・辻裕氏が指導を行っています。音楽の持つ力を使い、子どもたちの成長過程における心と身体に刺激を与え、人として「大切なもの」を育てる保育・教育法の習得をめざしています。

具体的には、主に「ティーチング」（＝ロールプレイ）形式を採り、先生役と子ども役に分かれて実践しながら、リトミックの手法を学びます。そして、在学中に「幼稚園・保育園のためのリトミック1級・2級指導資格」（リトミック研究センター認定資格）の取得をめざします。働き始めてからこの資格取得にチャレンジする保育士が多いなかで、就職する時点で取得できていることは、学生たちの大きな自信となっているようです。

命の重さを知る授業

子どもたちに必要な「感じる心」を、まず学生たちに。その考え方に基づく教育は、リトミックだけではありません。かつての時代にくらべて、野山が減り、子ど



姉妹施設「岡本ハーベスト保育園」で、授業で学んだ「ストーリーテリング」を実践。子どもたちの幸せな未来を願う、という原点を、実習は教えてくれます。

もたちが外で遊ぶ機会そのものも減少している現代において、子どもたちが自然に触れる機会は必然的に少なくなっています。このことは、現在の多くの学生たちにも共通しています。

虫や木や草花を含むたくさんの動植物の存在を知り、自然の営みのなかで自分が生かされていることに気づくことは、命の尊さを理解する人間になるために不可欠です。「自然保育」では、植物や野菜を種から育て、觀賞したり収穫したりして、それらが枯れてまた種になるまでを体験します。また、機会によって学内で虫や魚を育てることもあり、こうした教育を通じて、命への畏敬と、命の終わりに直面した際の心の動きをも学んでいます。

絵本やおはなしの世界を楽しむ力

絵本を楽しむ、語られるおはなしに耳を傾け、「感じる」機会を持つことは、子どもの時期にとっても大切なことです。絵本の読み聞かせは、多くの保育現場で行われていますが、本校は、子どもが絵本を楽しむことの重要性を、保育士が十分に理解し、より良く読み聞かせを行える力を身につけることが必要だと考えています。



このため本校では、保育士として、おはなしを語ることができことをめざして、「ストーリーテリング」を学ぶ授業を採り入れています。保育士自身が、絵本を楽しむ、おはなしを語ることを楽しめる力を育む学びを重ねるなかで、絵本に対する心の眼が開かれ、言葉への感覚を養い、語り伝えることの大切さと喜びを習得していきます。

そして、その力が、保育の現場で常に子どもの目を見て話しかけること、子どもの言葉にしっかりと耳を傾けること、子どもと想像の世界を共有することへとつながっていくのです。本校が「ストーリーテリング」を導入しているのは、そのことを確信しているためです。

初心者でも安心の「完全個人レッスン」

保育士をめざして確かな知識・技術を修得していくために、「不安」を「自信」に変えられる環境を、本校は全力で整えたいと考えています。そのひとつが、ピアノ指導に関する環境です。保育士になりたいけれど、ピアノを弾いたことがない。そうした悩みは、保育士志望者の中に少なくないからです。

ピアノ・歌を担当する教員陣はすべて音楽（ピアノ、声楽など）の専門家で、授業は個人レッスンの形態を採っています。また、完全防音のピアノ練習室を7室備えており、学生たちは予約を取っていつでも練習することが出来ます。このため、授業以外にも、平日の放課後に2名の教員が希望者のレッスンに対応しています。

本校には、ピアノ初心者から、幼少期に習っていた学生、さらに音楽大学卒業生まで、幅広い演奏レベルの学生が在籍します。そのなかで、初心者には手の構え方や音符の読み方から指導するなど、週に2度の個人レッスンを通じて、それぞれの段階に応じたきめ細やかな指導を展開しています。

さらに、「リトミック」や「保育演習」などの授業でもピアノに触れる機会があり、学生たちは、日々の保育のなかで子どもたちに向けて発揮できる演奏技術を、数多く、自然なカタチで身につけることが出来ます。

「子どもたちのお手本」になる

保育園は、主に0歳から5歳までの子どもたちを預かる場所です。小学校入学までのその日々は、生まれてから、子どもたちが自分なりの行動習慣を身につけていく期間に該当し、この時期に見聞きするすべてのものから子どもたちは多くのことを学びます。

いつか社会人として仕事に就き、家庭を持って生活していく未来を見据えた時に、他者と共存するために必要なマナー・社会ルールの習得は、生きる力として不可欠

です。これらは、ある程度の年齢に達してから理論のもとで学ぶことも可能ですが、本校では、小さいうちに感覚で身につけることで、自然な振る舞いとして定着するものと考えています。

そのため、学生たちには、自分たちが「子どもたちのお手本」となる存在であることを、折に触れて意識させるように心がけています。本校が、言葉遣いや立ち居振る舞いなどの礼儀作法を徹底して指導しているのは、そのためです。

背筋の伸びた姿勢で人と接する姿は格好いい、きちんとした装いは美しい、相手を思うゆえの丁寧な言葉遣いは温かい。身近な人間を見て「素敵だな」と感じることで、子どもたちの振る舞いに大きな影響を与えようと思うからこそ、真似されて恥ずかしくない振る舞いを身につけるように指導しています。

今日、子どもを育てる多くの家庭が、たくさんの悩みや不安と向き合い、時に孤立感を覚えているといわれています。その感覚は、少なからず子育てと子どもたち自身の生育に影響するでしょう。

子育ては、どれほどの苦労を伴うものであっても、本質的に楽しくわくわくするものでなければいけない。本校は強くそう思っています。だからこそ、多くの家庭の子育てが、今よりもっと楽しいものになるように、そのことが、子どもたちの明るい未来につながるようにと願い、心を注ぐことのできる保育士たちを育てたいと考えているのです。